

公益財団法人 檉の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 8 年 5 月 14 日
②法人・団体名	特定非営利活動法人志塾フリースクールラシーナ		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	大阪府富田林市甲田 2 - 2 0 - 1 4		
④責任者氏名	田重田 勝一郎	(役職名等)	理事長
⑤担当者氏名	山中 絢音	(役職名等)	理事

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-031	⑦助成金額	100 万円	⑧申請カテゴリー	DS
⑨奨学活動名	大学とフリースクールが連携！不登校を対象にした完全個別指導のオンライン学習会及び進路支援事業				
⑩主な実施場所名・及びその住所	当団体事務所：大阪府富田林市甲田 2 - 2 0 - 1 4 および オンライン				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

様々な背景により学びに繋がらない中高生の子どもの進学・就学支援を目的として下記に取り組んだ。

1. オンラインでの完全個別指導の学習支援
週 1 回 1 時間×月 4 回を基本とした、個別の学習支援 合計 1702 回
2. 保護者への相談支援、進路の情報提供
対象生徒 14 名について、生徒と保護者との面談を実施した。
3. キャリアコンサルタントによる進路相談支援
教室とオンラインのハイブリッド形式で 7 回実施（スタッフ向け含む）
4. 大学との連携(研究生のフィールドワーク及び支援員として受け入れ)
オンライン支援のための教材・カリキュラム・コンテンツ作成
連携先の大阪公立大学の東根准教授の研究室より大学生 1 名を受け入れ、学習支援員としての活動と、探究的な学びのための教材づくり（模擬選挙ワークショップ）を実施。
また、教材作成チームで数学の教材、英会話の教材づくりに取り組んだ

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A：人)	平均時間 (B：時間)	活動量 (A × B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	302	5	1510	延べ人数=授業数×生徒数（月別）の集計
高校生等	48	4	192	
大学生等				
学習支援員等	452	5	2260	

その他				
合 計			3962	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：大学とフリースクールが連携！不登校を対象にした完全個別指導のオンライン学習会及び進路支援事業

法人・団体名：特定非営利活動法人志塾フリースクールラシーナ
作成者 氏名：理事長 田重田 勝一郎

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

不登校や発達特性を持つ中高生の多くは、経済的・心理的・地理的な理由から学習機会を失いやすい状況にあります。低価格の個別学習支援は限られており、発達障害を理由に入塾を断られるケースも多くあります。また、ひとり親家庭や地方在住で送迎が困難な家庭や、心理的ハードルから居場所へのアクセスが難しい子どもも少なくありません。

こうした課題に対し、曜日・時間を固定したマンツーマンの完全個別指導によるオンライン学習支援を中核に据え、保護者への相談支援・進路情報提供、キャリアコンサルタントによる進路相談を実施しました。大阪公立大学の東根ちよ准教授から支援内容に関するアドバイスをいただくとともに、研究室の大学生 1 名が学習支援員および教材作成に携わり、子どもの特性に応じた教材・カリキュラムの開発にも取り組みました。

2. 実施した奨学活動の詳細

① オンラインでの完全個別指導の学習支援

週 1 回 1 時間×月 4 回を基本とした、マンツーマン（担当制）によるオンライン個別学習支援を実施しました。活動時間は平日 10 時～21 時。使用ツールは Zoom を基本とし、eboard 等の教材を活用しました。令和 7 年度の総実施回数は **1,702 回**。対象となった生徒は **31 名**（中学生・高校生）で、生徒一人ひとりの学習状況・発達特性・生活背景に応じた個別の学習計画を立て、担当支援員が継続的に関わりました。

不登校の生徒に対しては、保護者からの要望に応じて所属校に学習内容の報告書を送付し、出席認定につなげる取り組みも行っています。令和 7 年度は保護者からの申し出がなかったため実績はありませんでしたが、制度として引き続き対応できる体制を整えています。

② 保護者への相談支援・進路の情報提供

受験生や長期の不登校生を含む対象生徒 14 名について、学習支援コーディネーターが生徒・保護者・担当支援員それぞれと個別面談を実施しました。日常的に支援に関わるスタッフとは別の第三者が担当することで、それぞれが率直に話しやすい環境をつくりました。面談では学習状況の共有・進路情報の提供・家庭での困りごとへの相談対応を行いました。

面談から見てきた主なテーマは以下のとおりです。

進路選択の支援：複数の生徒が高校・大学進学について具体的な相談を持ち込みました。通信制高校・

国際系コース・美術系大学など、それぞれの状況に応じた選択肢を整理し、保護者とともに方向性を考えました。教育バウチャー（学びクーポン等）の活用など、経済的な観点からの情報提供も行いました。

不登校の生徒への個別対応：英語の授業がきっかけで不登校になった生徒について、本人・保護者それぞれの思いを丁寧にヒアリングしました。保護者からは「親以外の第三者からの意見の方が本人にすんなり入る」という声があり、コーディネーターが架け橋となることで進路への意識が少しずつ前向きになっていく様子が確認されました。

保護者自身のケア：面談では子どもの状況だけでなく、保護者自身の体調・生活の負担感・不安についても確認しました。「自分のペースを保ちながら働いている」「特に大きな困りごとはない」という声がある一方で、「不登校の兄弟がいるなかで、一見問題のない子どもへのケアをどうすべきか」と悩む保護者もあり、外部支援機関への橋渡しを検討した事例もありました。

授業内容へのフィードバック：生徒から「もっと難しい英会話に挑戦したい」「英会話の時間をもっと増やしてほしい」という積極的な要望があり、担当支援員へフィードバックして授業内容の改善につなげました。保護者からも「英語が好きになった」「先生を信頼している」という言葉をいただき、支援の方向性が概ね適切であることを確認できました。



講師座談会（コーディネーターMTG）



学習支援スタッフ全体ミーティングの様子

③ キャリアコンサルタントによる進路相談支援

「オンライン保健室」として、教室とオンラインのハイブリッド形式で年間**7回**実施しました（スタッフ向け研修含む）。担当は増田育世さん・板津薫さんの2名。

#	実施日	形式	担当	内容	参加者数
1	2025 年 9 月 18 日（木）	教室リアル（泉北教室）	増田・板津	「自分らしさを知る 60 分」ワークグラム診断×キャリアカウンセリング。FS 生対象	7 名
2	2025 年 11 月 13 日（木）	教室リアル（富田林教室）	増田・板津	同上。富田林教室の生徒向け。小・中・高校生の全年代参加。個別相談 1 件も実施	4 名
3	2025 年 12 月 1 日（月）	教室リアル（泉北 BASE）	増田・板津	スタッフ向け研修会。12:00～ランチ会、14:00～「自分らしさを知る 60 分」	15 名
4	2026 年 2 月 12 日（木）	オンライン	板津	卒業予定の高校生向け個別相談（本事業の生徒等）	2 名
5	2026 年 2 月	教室リアル（富田林教室）	増田・板津	学習塾生向けワークグラム WS。WS 後に個別相談	8 名



3月19日キャリア教育実践報告会デジタルチャシ

④ 大阪公立大学との連携（研究生のフィールドワーク及び支援員として受け入れ）

大阪公立大学大学院現代システム科学研究科の東根ちよ准教授の研究室より大学生1名を受け入れました。令和7年5月から継続的に関わっていただいております、学習支援員として**中学3年生2名を各2ヶ月間（週1回・月4回）担当し、授業担当コマ数は計16コマ**（各生徒8コマ×2名）です。

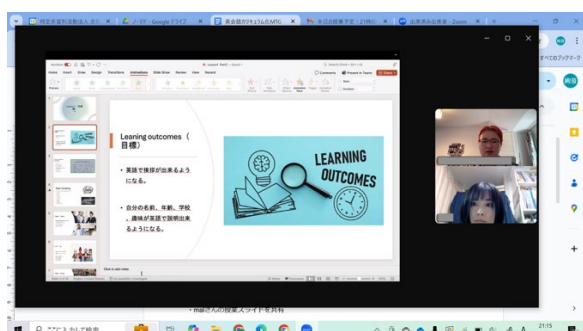
当該大学生は学習支援員として生徒の授業を担当しながら、**探究的な学びのための教材づくり**（模擬選挙ワークショップ）にも取り組みました。また、東根准教授からは事業全体を通じて学習支援の内容・方法に関するアドバイスをいただき、より効果的な支援の実現につなげました。

⑤ オンライン支援のための教材・カリキュラム・コンテンツ作成

教材作成チームを組成し、以下の教材・コンテンツ開発に取り組みました。

- **模擬選挙ワークショップ教材**：大阪公立大学の大学生1名が主体的に開発（探究的な学び）
- **数学の教材**：生徒の習熟度・特性に応じた個別学習用
- **英会話の教材**：オンライン支援に特化した対話型コンテンツ（初級編・中級編）

発達特性（多動・不注意、見通し不安、場面緘黙症など）の異なる子どもに対応できるよう、Zoomのホワイトボード機能やミニホワイトボードの活用、○×カードでの意思表示など、各特性に応じた支援メソッドも整備しました。



3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

【得られたもの】

本事業を通じて最も大きな成果のひとつは、学習支援員の中から「学習支援コーディネーター」という役割を設けたことです。コーディネーターは、日常的に支援に関わるスタッフとは異なる第三者の立場から、学習支援担当スタッフ・生徒・保護者それぞれと個別に面談を行い、フィードバックや相談対応を担いました。普段の支援関係の外側に相談できる存在が生まれたことで、それぞれが率直に話しやすい環境を整えることができました。この仕組みは保護者支援の柱として機能しただけでなく、オンライン個別指導そのものの質向上にも直結しました。

また、大阪公立大学との連携により、事業全体に対する第三者評価が加わったことも大きな収穫でした。東根准教授からの助言は次の一手を考える具体的な材料となり、事業の改善に役立てることができました。さらに、大学生と直接つながりを持てたことで、本事業の枠を超え、当団体が取り組む堺市×大阪公立大学連携事業（メタバースを活用した不登校支援）など他の事業にも大学生に関わっていただく機会が生まれ、連携の広がりへとつながりました。

加えて、本事業を通じて複数の高校生を受け入れるなかで、学習塾や通信制高校サポート校など当団体がリアルな拠点で展開している他の学習支援事業においても本事業のリソースを活用して支援する新たな枠組みが誕生するきっかけとなりました。学習支援の形が拠点を越えて有機的につながるといふ波及的な効果が生まれたことは、事業の発展という観点から特筆すべき成果です。

また、本事業において初めて教材づくりに本格的に着手できたことも、大きな前進です。数学の教材・英会話の教材・探究的な学びのための教材（模擬選挙ワークショップ）の3種類を、それぞれ別の担当者が作成しました。英会話教材は初級編・中級編という明確な区切りを設けたことでマイルストーンが置きやすく、事務局メンバーと教材作成担当が毎週打ち合わせを行いながら着実に進めることができました。探究的な学びの教材もテーマが定まるとゴールが見えやすく、1年間で1本作り切ることができました。

【反省点・課題】

一方、数学の教材については、着手前に全体の範囲と作成計画を十分に定めることができませんでした。「中学1年生の正負の数」から作り始めたものの、数学という教科の範囲の広さに対してスコープの設定が甘く、1年間でカバーできたのはごく一部の単元にとどまりました。結果として、実際の授業で活用できる見通しが立たないまま年度を終えることとなりました。教材開発においては、最初の計画段階で「どこまでを1年間のゴールとするか」を明確にすることが不可欠であるという教訓を得ました。次年度以降は、開発前に対象範囲・単元数・スケジュールを具体的に設定してから着手する運用に改めます。

【今後への発展性】

学習支援コーディネーターという仕組みは、今後も継続・発展させることで、支援の質を担保しながら規模を拡大するうえでの重要な基盤となります。大阪公立大学との連携は本事業を起点として他事業にも広がっており、引き続き協働関係を深めていきます。また、本事業のリソースをリアル拠点の事業と

かけ合わせる取り組みは、オンラインとリアルを統合した独自の支援モデルとして、他団体にも参考となるものに育てていきたいと考えています。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

【大学生が自ら教材テーマを見つけた話】

大阪公立大学大学院 東根ちよ准教授の研究室から参画した大学生は、社会科の教員免許取得を目指していました。「生活に身近な題材で探究的な学びができるものを一緒に考えよう」とスタッフと話し合うなかで、本人がインターネットで見つけてきたのが「模擬選挙ワークショップ」の実践事例でした。「こういうのを見つけました。面白そうじゃないですか」という一言から教材開発がスタートし、1年間で完成させることができました。与えられた課題をこなすのではなく、自分で問いを持ってきた経験は、大学生自身の学びにもなったと感じています。

【英会話との出会いが進路を変えた】

本事業のオンライン英会話レッスンに参加していたある生徒は、もともと英語への苦手意識がありました。しかし担当支援員との継続的な対話型レッスンを通じて英語への自信を取り戻し、令和7年度末には国際系のコースへの進学を果たしました。「英語が好きになった」という言葉が、支援に関わるスタッフ全員の励みになりました。

【英語への苦手意識が不登校のきっかけに。ノマドで自信を取り戻した生徒】

中学1年の夏休み明けから不登校になったある生徒のきっかけは、学校の英語の授業でした。2人組になってお互いに英語で会話する場面があり、小学校時代のブランクから英語に自信が持てなかった本人は、同級生の前でうまく話せない自分がひどく恥ずかしかったといいます。「英会話のある時だけ休もうと思った。でも、なぜその日だけ休むのか聞かれたら英語が苦手と説明しなくてはいけなくなる。だから毎日休んだほうがいいと思った」——面談でそう話してくれました。他の授業は楽しかったけれど、行けなくなってしまった、と。

本事業のオンライン学習支援に参加するようになってから、少しずつ変化が生まれました。担当の支援員と毎週1対1で英語に向き合い続けるなかで、語彙が増え、物事を説明したり感情を言葉で表現する力が育っていきました。コーディネーターとの面談では、以前は「わからない」と答えることが多かった質問に対して、自分の言葉で考えを伝えられるようになっていました。

令和7年度末には、通信制高校への進学という具体的な目標を持ち、「今は健康で、家族とも仲が良く、幸せだと思う」と自分から話してくれました。「オンラインでつながり続けること」が、この生徒にとって安心して学べる場になっていたと感じています。

【高校受験から大学受験まで、ともに歩んだ6年間】

高校受験のサポートをきっかけに本事業のオンライン学習支援を始めたある生徒は、その後も継続して支援を受け続け、令和7年度に大学受験まで担当支援員と一緒に歩みました。学習支援が単なる「勉強を教える場」ととどまらず、長期的に子どもの成長に寄り添う関係性を築けることを、あらためて実感した事例です。

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリーにて「S」が付されている団体）

大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科 東根 ちよ准教授

複合的な困難を抱える子育て家庭に対する学習支援をめぐっては、「活動場所への子どもの移動手段の確保が難しい」「支援員の確保が難しい」「事業の周知が難しい」など、さまざまな課題を見聞きしますが、今回の活動助成の取り組みからは、課題よりも可能性を感じることができました。その背景には、学習支援に組み込まれていた3つの特徴があります。

1つ目は、オンラインでの実施です。移動手段が確保できない、あるいはリアルな関わりが難しい子どもたちにとってオンラインはアクセスの障壁を下げる方法ですが、リアルな関わりを重視する対人援助の領域では、オンラインが未だ十分に使いこなされていない現状もあります。そのような中、日常的にオンラインとリアルな関わりを組み合わせた活動を展開される団体だからこそ、今回のオンライン学習支援をスムーズに実施されていました。また、オンラインでの実施は利用者だけではなく、大学生の支援員としての関わりやすさにもつながっていました。

2つ目は、キャリアコンサルタントの関わりです。学習支援に加えて行われた進路相談では、キャリアコンサルタントのかたが応対され、具体的なエピソードからは、キャリアコンサルタントだからこそ続いた対話の時間や引き出された受け答えがうかがえました。教育や福祉の専門職だけではない、多様な大人との関わりは、子どもの経験を豊かにすることにもつながると考えられます。

3つ目は、教材開発です。教材開発を行うことで、今回の学習支援の内容を、今後より多くの支援員と共有できるコンテンツにすることがめざされています。さらに、教材開発には教育や福祉について学ぶ大学生が携わり、団体のスタッフのかたが大学生に伴走しながら作成されていました。「みんなで使えるコンテンツを、みんなでつくる」という、団体の教材開発に対する姿勢も印象に残りました。

オンラインとリアルな関わりを組み合わせ、さまざまな人の立場や専門性を掛け合わせながら進められる今回の活動助成の取り組みは、困難を抱える子どもの学習支援の可能性を広げてくれるものだと思います。